

第12回 「事故の現場から②」 日航ジャンボ機墜落事故

2009年7月6日

8・12連絡会

(日航ジャンボ機御巢鷹山墜落事故被災者家族の会)

事務局長 美谷島邦子

- 1、はじめに 1985年8月12日事故発生、520人が死亡、4人が生存
- 2、息子健が、飛行機に乗り、我が家に戻ってくるまで
9歳、初めての飛行機、初めての一人旅。
- 3、事故から3日目の朝、急な山道をはうようにして、現場に
- 4、隣の席
- 5、事故から4ヶ月目、8・12連絡会を結成
遺族の絆・280家族（24年間の活動は、『旅路』上毛新聞社に収録）
- 6、悲しみが集まる
- 7、文集『茜雲』と機関誌『おすたか』
これを核に、遺族の絆はさらに強固に 『茜雲総集編』（本の泉社より発刊）
- 8、事故原因と刑事告訴 安全文化を高める運動に
- 9、安全に時効はない
- 10、「僕は、ここにいるよ、ママ」
- 11、ゆるやかな連帯が8・12連絡会の基本方針
- 12、日航の山小屋
- 13、失われた命生かして
羽田の整備工場地区に日航の安全啓発センターが事故から20年目にできる。機体残骸の一部や潰れた座席、遺書、遺品、が残され、教訓がパネルになり、事故を後世の人に残すための場所が確保された。「失われた命を生かして欲しい」という遺族たちの21年間の思いがやっと叶った
- 14、遺品 遺品の向こうにある物語
- 15、日航社員への講話をはじめ 刑罰ではないところから始まる安全
- 16、安全を願う聖地
違う事故の遺族とも連携
- 17、遺族自身も支援者になれる 自助グループの役割が大きい
- 18、報道 24年間を振り返って
- 19、おわりに

以上